Homage

Dr. Akira Miyake（1925-2008）

去る2008年11月7日，教育研究所元所長であられた
三宅彰名誉教授（理学博士）（83歳）が逝去されました.

研究所といたしまして，ここに謹んで哀悼の意を表します.

Dr. Akira Miyake, former Director of IERS, Professor Emeritus,
passed away on November 7, 2008.

IERS expresses its condolences.

David W. Rackham
Director of IERS

追憶の三宅彰先生：慎重で寡黙な紳士
In Remembrance of Prof. Akira Miyake: A Prudent and Quiet Gentleman

中野　照海 NAKANO, Terumi

● 国際基督教大学名誉教授
Professor Emeritus of ICU

三宅先生との仕事の始まり

暮れの12月になって，例年のように年賀状を書き始めていました．昨年いただいた三宅先生の賀状を取り上げたとき，ふと手が止まりました．当方への宛名も文面も，いつもの律義な小さい字で書かれていました．そんなとき，教育研究所の係りの方から『ICU 教育研究』に，11月にお亡くなりになった三宅先生の追悼文を書くようにという連絡がありました．そこで，初めて先生のご逝去を知りました．その数日後の12月30日に，立川明先生から讃岐和家先生ご逝去のお知らせをいただきました．教育研究所で．とても身近なおつきあいをいただいた同世代のお二人を失ったことで，寂しさもひとしおの年末でした．

三宅先生は，旧制高等学校のときにサッカーの選手をされていたほどですので，頑健な体格の方でした．長生きをする方だと思っていましたので，ご逝去は驚きでした．三宅先生と近しく仕事をご一緒したのは，1968年から70年にかけての「全共闘紛争」のときからでした．ICU の「紛争」の折という危機的状況でのお付合いには特別のものがありました．もともと研究と教育とに集中すべき大学において，紛争や闘争は不似合なのですが，大学の状況が安定している現在からは想像もできないような事態が当時起こっていました．

当時，東大の「安田講堂攻防戦」として，テレビで中継されたように，紛争は激烈でした．ICU でも，本館などの占拠を解くためには，機動隊の力を借りなければなりませんでした．当時の推移を十分に記さないと，三宅先生の経験された大変さにも，これに耐えられた偉さにも触れることができませんが，私自身もこの不愉快な時代を記すのは，気が進みませんので割愛します．

東京大学は，長期に渡る紛争のために卒業生を出すこともできず，入試も中止となりました．しかし，東大のような国営の大学と異なる私学の ICU では，新たな学生を入れないことには，社会の付託に応えられないばかりでなく，財政的にも損害が大きくなります．こんなときに，学長代行にお就きになったのが，三宅先生でした．私は，そのとき学長補佐として，先生とご一緒に仕事をしました．

大学での仕事が夜遅くなり，食事をするにも食堂などは閉っている時間に，私の家に寄っていただいて，貧しい夜食をご一緒したことも何度かありました．夜中のことなので，ろくな食材もなかったのでしたが，美味しそうに食べていただいたのを覚えています．

教育研究所の共同研究

ICU は，大学紛争とは無縁の大学のように思われがちですが，わが国の大学の中では，紛争が多かったように思います．本館などの建物の占拠が行なわれた紛争が 6 度ありました．三宅先生が学長代行をされていた1968年の大学紛争では，全共闘の学生が大学本館，理学館，図書館を占拠して，「3 項目撤廃闘争」を始めました．3 項目というのは，①保安員撤去，②教授会議事録公開，

③進学適性検査反対闘争処分者撤回でした.

3 項目の要求のうちの，進学適性検査反対闘争処分者撤回というのは，1967年に本館占拠があり，これでも機動隊による占拠者の排除がありました．このとき 6 名の逮捕者があり，後に学生委員会の調査と判断によって，学生10名の除籍が行なわれました．先年お亡くなりになった D・ワース先生や私は，このときの学生委員会の委員でした．当時の学生部長が讃岐和家先生で，「進学適性検査」の責任者が心理学の原一雄先生でした.

ICU は，わが国の大学入試では特徴的でした．学力よりも，能力を測る方法を採用していました．日本の学校教育の問題を考える場合，大学入試はその中心課題となります．かっての OECD 教育調査団の『日本の教育政策』（1971年）によると，日本社会には出生による階級はもはや存在しないが，「18歳の大学入試によって階級が発生する」と記されています．日本の教育改革は大学入試を改善しない限り，結局は不毛に終わるといえます.

ICU では，開学以来，独自の入試の方法を実施してきました．これを改めて吟味するために，当時の教育研究所長であった三宅先生が提案されて，研究所の共同研究として「大学入試における学力テストと能力テストの比較研究」を，私学振興財団の学術研究振興資金に提出しました．この共同研究は，1980年度，1981年度，1982年度と 3 カ年に渡って研究費の援助を受けました.

3 年の共同研究が終わったとき，その年度に所長であった私が発表することになりました．私の願いは，発案者の三宅先生が発表されるべきと願っていたのですが，お受けになりませんでした．会場は檀上に金屏風が置かれるような重々しさでした．学術研究資金が日本経団連の寄付によっていましたので，発表会に経団連のお歴々がお見えていました．発表後のパーティで，以前から存じ上げていた花村仁八郎（経団連常務理事）が，「テストの妥当性は大学卒業後に社会に出てからの仕事で判断すべきではないか」と言われたのを思い出しています．これに，もしも三宅先生だったらどうお応えになられたかと思いました.

研究者としての三宅先生

大学教師の願いは，良い研究ができ，良い教育ができることにありますが，三宅先生は図らずも，大学のもっとも困難な時代に学長代行や副学長の職にお就きになりました．以前に，大学外部の人から，「三宅先生は，秀才の三兄弟のお一人でしょう」と言われたことがありました．先生は私的なことをお話しにならない方でしたが，原子力発電所の話の折に，ご兄弟のお一人が関係されていることをうかがったことがありました.

この追悼の文章を書くにあたって，物理専門の先生のご業績を判断することができませんので，『教育研究』の「所報」に記載されている研究所長の頃（1978–81）の個人活動状況を拝見しました．1978年の記述によりますと，文部省科研（A）「高分子における相互作用と分子運動の理論的研究」研究代表のほか 2 つの共同研究，日本物理学会副会長，応用物理学会欧文誌刊行会委員長をしておられました．日本物理学会など 4 件の研究発表，研究論文として A Lattice Theory of the Chain Dimension: Repts. Progre. Polymer Phys. Japan 21(1978)27–28などの欧文論文 5 編が挙げられています．研究を続けていらっしゃった先生が，動乱の時代の大学の責任者となられたことは，お気の毒としか言いようがありません.

いつも慎重で，派手なことのお嫌いで，常に飾ることをされなかった寡黙な先生が，ICU の危機に当たられたことは感謝以上の気持であります．紛争当時，いわれのない非難に対して，じっと耐えていらっしゃった姿が目に浮かびます．1980年11月にご夫人が亡くなられましたが，以来ご不自由な暮らしをしていらっしゃいました．天国ではご夫人と再会され，ようやく安息の時を迎えられますようにと祈っております．昨年は，理科教育をご担当の D・C・ワース先生，そして讃岐和家先生と，三宅学長代行とともにお働きになった先生方が相次いでお亡くなりになりました．三宅先生は，讃岐先生の「あのときは，きつかった」というお話を静かに聞いていらっしゃると思います．私も，三宅先生とともに生きた時代を誇りに思っています.